



Title	名古屋大学図書館蔵『いざよひ物語』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1990, 53-54, p. 53-63
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68807">https://hdl.handle.net/11094/68807</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『いざよひ物語』の成立

三 村 晃 功

### 一 はじめに

中世類題集については、筆者はこれまで『二八明題集』『題林愚抄』『明題和歌全集』『摘題和歌集』などの成立に関わる基礎的研究を公表し、近時『統五明題和歌集』(以下『統五明題集』と略称する)の調査報告を発表して、この領域については多少研究を進めてきたが、この『統五明題集』を精査、検討していた際に想起されたのが、『いざよひ物語』なる『風雅集』から『新統古今集』に至る五勅撰集からの抄出歌で編纂された類題和歌集であった。

ところで、この『いざよひ物語』なる類題集については、すでに安田徳子氏『「いざよひ物語」翻刻』(名古屋大学国語国文学)第四十四号、昭和五四・七)に、簡単な解題を付した翻刻紹介があり、その内容、成立時期、編纂目的などについては、おおむね正鵠を射た記述がなされていて、ほとんど問題にするには及ばないのである。しかし、本書の成立過程については、多少曖昧な論述が指摘され、

その成立過程の問題については、なお検討の余地が残されているように判断されるので、このたび、本書を精査した結果、明白にし得た、本書の成立に関わる問題について、以下に報告し、大方のご叱正を得たいと思う。

### 二 問題点の所在

さて、本書の成立の問題の検討に入る前に、本書の書誌的概要に言及しておこう。この点については、安田氏の前掲論文に簡にして要を得た解説があるので、ここにはそれを引用させていただくことにしたい。

本書は、神宮皇学館文庫、皇W・九一・一四・H。縦一六・二樞、横一五・五樞の枳形、鳥の子列帖装一冊本。香色地銀花唐草紙の表紙の左上に題簽を貼り、「いざよひ物語」と墨書する。内題はない。墨付一六丁、巻頭巻末に各一丁の白紙。一面一〇行、一首二行書。奥書、識語の類はない。巻頭に「神宮皇

学館大学図書館之印」「名古屋大学図書館」「来田家蔵」の印がある。表紙見返しに極札二枚が添付されている。一枚は「高辻殿 適長卿 いざよひ物語（全一冊）」とあり、いま一枚には「和歌四天王之内淨弁」と記されている。書写者は不明であるが、少なくとも極札にいう「淨弁」は、「新後拾遺集」撰定より前の応安五年に没しているので、内容からみて時代が合わない。「適長」の方は尊卑文脈、及び群書類従所収の「菅原系図」には該当する人物が見当たらず真疑のほどは判断できない。室町後期写か。

ところで、本書は、冒頭に序文があり、続いて、「寄月歌」七十一首、「寄雲恋」八首、「寄葵恋」から「寄水恋」まで各一首の都合百二十三首を収載する小規模の類題集であるが、次の

- (1) つらきにもひとりや月のやどるらん こゝろにしまぬひとを  
こふとて (寄月恋・三)

の出典不詳歌を除くならば、収載歌はすべて、『風雅集』から『新統古今集』までの五勅撰集に収録されている。したがって、本書の成立の問題を考えると、本書の収載歌は当該勅撰集から直接採録されたのではないかという予想がまず生ずるので、この点を検討してみると、たとえば、歌題の視点から次の

- (2) いかにしてなみだつゝまんかげやどす 月こそ袖の色にいづ  
とも (寄月恋・一)
- (3) よな／＼の月もなみだにくもりにき かげだに見せぬひとを  
こふとて (同・一二)
- (4) とひこかしましたおなじ世の月をみて かゝるいのちのこる  
ちぎり (同・一四)

- (5) つらき名のたぐひまでやはかこつべき わかれし袖の有明の月  
(同・二二)

- (6) 有明の月をその夜のかた見にて なぐさむほどのちぎりだに  
なし (同・二五)

の(2)・(6)の五首を見ると、(2)は『新拾遺集』の「前大納言為定」の詠で、詞書に「正和五年九月十三日夜後醍醐院みこの宮と申しける時、五首歌めされけるに、月前忍恋」とあり、(3)は『新千載集』の「前中納言定家」の詠で、詞書に「洞院撰政家百首歌に、不逢恋」とあり、(4)は『風雅集』の「前中納言定家」の詠で、詞書に「逢不逢恋の心を」とあり、(5)は『新後拾遺集』の「木上天皇（後円融院）」の詠で、詞書に「永和四年八月十五夜、三首歌講せられし次に、月前別恋」とあり、(6)は「藤原光経」の詠で、詞書に「建保七年二月内裏歌合に、曉更恋」とあって、『いざよひ物語』の「寄月恋」の歌題と一致をみないのである。ということは、『いざよひ物語』が(2)・(6)の五首を直接当該勅撰集から採歌した可能性は皆無と言ってよく、安田氏が「直接、勅撰集を資料として本集が編まれたと見ることは疑問である」と推測されたとおりである。

それでは、『いざよひ物語』収載歌はいかなる作品から採録されたのであろうか。この点について、安田氏は、『風雅集』から『新統古今集』までの五勅撰集をもとにして撰ばれた類題歌集に、『統五明題集』（永正二年「一五一五」、今川氏親、東素純撰）がある。（中略）この集と本書の間に直接の関連は認め難いが、この集の恋部と本書を比較すると、歌の配列等に共通する点も多く、歌の分類に共通した意識を見出すことができる。あるいは、このような類題歌集をもとにして、本書は編まれたのではなからうか」と言及

され、本書が『統五明題集』のごとき題類集から抄出された可能性を示唆された。それでは、『統五明題集』のごとき題類集はいかなる名称の作品であろうか。この点については、残念ながら、安田氏はこれ以上の言及を避けておられるので、現在のところ、『いざよひ物語』の撰集資料は不明と言わざるを得ないのである。

ところで、『いざよひ物語』収載歌と『統五明題集』のそれとを比較、検討してみると、『統五明題集』が収載していない『いざよひ物語』収載歌は、すでに引用した(1)の出典不詳歌と、次の『新後拾遺集』の「賞誉法親王」の

(7) わすれてし人は軒ばの草の葉に かけてもまたずくものふる  
まひ (寄蛛恋・一〇〇)

の(7)の歌のわずかに二首を数えるに過ぎないのである。すなわち、安田氏は、本書と『統五明題集』との関係を、「直接の関連は認め難い」と否定されるけれども、この事実は、これまで二次的撰集としての題類集の成立の問題を扱ってきた経験からみて、筆者には、両書の間要充分密接な関連がある、と見なし得る根拠になるように推察されるわけである。したがって、『いざよひ物語』と『統五明題集』とは、はたして直接に関係があったのか、否か、この問題について、以下、具体的に論述していきたいと思う。

### 三 撰集資料の再検討

さて、『いざよひ物語』収載歌と『統五明題集』のそれとを比較して、最も密接な関連が認められるのは、『寄雲恋』の例歌である次の八首である。

- (8) ものおもふころの色に染められて めに見るくも人々や恋しき (寄雲恋・七二)
- (9) 恋あまるながめを人はしりもせじ われと染なす雲のゆふぐれ (同・七三)
- (10) 今しもあれ人のながめもかゝらじを きゆるもおしき雲の一むら (同・七四)
- (11) 待なれしむかしににたる雲の色よ あらぬながめのくれぞかなしき (同・七五)
- (12) ふきまよふあらしの空のうき雲の 行あふべくもなきちぎり哉 (同・七六)
- (13) あしひきの山のはとをき天雲の かゝるかたなき身の契かな (同・七七)
- (14) あまぐもの八重かさなれる峯なれや 恋もうらみもはれぬころは (同・七八)
- (15) しられじな人の心のうきぐもは 我そではれぬしぐれなりとも (同・七九)
- この(8)～(15)の八首のうち、(8)～(11)が『風雅集』の為兼・花園院・永福門院・朔平門院の詠、(12)～(15)が『新千載集』の為定・良基・徽安門院・尊氏の詠であり、これらの八首は、当該勅撰集においても、『いざよひ物語』の配列順に収録されているが、面白いことに、『統五明題集』は「寄雲恋」の例歌として、このほか「新拾遺集」と『新統古今集』からも採録しているが、この八首に限って言えば、『いざよひ物語』と『統五明題集』とは、すべての面で完全に符合しているのである。ちなみに、このほかの題類集の「寄雲恋」の例歌の収録状況を見ると、『題林愚抄』と『明題和歌全集』

には、このほかに『続千載集』と『新拾遺集』からの詠が認められるが、『風雅集』からの詠と4の詠は収載されておらず、また、『摘題和歌集』は当該歌題と例歌を収載していないので、これらの類題集から『いざよひ物語』が採録した可能性は皆無ということになろう。ところで、この八首に限定すれば、『統五明題集』とまったく同じ条件を備えた類題集に『類題和歌集』が見出され、その点から言えば、『いざよひ物語』と直接関係のありそうな作品として、『統五明題集』のほかに、さらに『類題和歌集』を候補にあげなければならぬのであるが、はたして、この問題についてはいかがであらうか。さらに検討を進めていこう。

さて、次の四首は、『いざよひ物語』の巻頭近くに配列されている『寄雲恋』の例歌である。

(14) 月だにもしのばししらじわが袖に かゝるなみだのやどりありとも (寄雲恋・四)

(15) 月見ればねられぬ夜半といひなして なみだばかりをなをつゝむかな (同・五)

(16) 人とはぐ月ゆへ落るならひぞと こたへてそでのなみだとめまし (同・六)

(17) ひとしれぬ夜はの思ひのかよはずは おなじねざめの月を見ましや (同・七)

この四首は、いずれも『新千載集』収載歌で、(14)が「月前忍恋」の俊光女の詠、(15)が「寄月忍恋」の長綱・義詮・遊義門院の詠であるが、この四首の収録状況を見ると、『統五明題集』が『いざよひ物語』と同様に「月前忍恋」「寄月忍恋」の歌題を連続させて配列しているのに、『類題和歌集』は「月前忍恋」の歌題は恋部三

に、「寄月忍恋」の歌題は恋部四にあつて、両題の間にあまりにも間隔があき過ぎていたので、『いざよひ物語』の編者がこの両題を連続させて配列することは、ほとんど不可能に近いと言わざるを得ないであらう。ここに、『いざよひ物語』が参考した類題集として唯一、『統五明題集』が残ってくるのである。なお、『統五明題集』と『類題和歌集』とがこれほどまでに完全に符合するのは、『類題和歌集』が撰集資料として、『統五明題集』をそのまま利用しているからではあるまいか。

したがって、ここで改めて、『いざよひ物語』と『統五明題集』とが直接に関係があったのではないか、という問題を検討してみよう。

さて、『いざよひ物語』の「寄月忍」の例歌である、

(18) 長月の有明の月はいでにけり こひしき人のかげはみえねど

(19) 有明の月をその夜のかた見にて なぐさむほどのちぎりになし (寄月忍・二四)

(20) いかにせんこぬよあまたのそでの露 月をのみまつぐれのそら (同・二五)

(21) みよかしなはつかあまりの月だにも 今まで人にわかれやはする (同・二六)

の(18)の四首は、(18)が『新統古今集』収載歌で、(19)が「秋夜恋」の為仲の詠、(20)が「晝更恋」の光経の詠、(21)が「暮恋」の後鳥羽院の詠で、(21)が『新後拾遺集』の「深夜恋」の頼政の詠であるが、ここで翻って、これらの歌題を異にする四首が何故に、『いざよひ物語』では「寄月忍」の歌題下に連続して配列されているのかの間

題を考えてみよう。ところで、この問題に示唆を与えるのが、原拠資料の勅撰集や『類題和歌集』であることは今更言うまでもないが、しかし、これらの文献が不適当であることについては、すでに前述したとおりであるから、ここに有力な候補として唯一残されていた『統五明題集』との比較、検討が要請されるのである。そこで、(23)の詠歌を掲載している『統五明題集』の歌題配列の有様を見てみると、「秋夜恋」「冬恋」「初冬恋」「冬夜恋」「歳暮恋」「暁恋」「暁更恋」「暮恋」「夕恋」「夜恋」「深夜恋」のごとくで、さらに、この十一題下に収められた例歌二十四首を吟味してみると、和歌のなかに「月」を詠み込んでいるのが、当面の四首で、残りの二十首には「月」が素材として扱われていない実態が判明する。しかも、当面の四首は、『統五明題集』の配列順序もまったく『いざよひ物語』のそれと符合しているのだ。ここで、原拠資料とは異なる歌題を有しながら、これらの四首が『いざよひ物語』では一括して「寄月恋」の例歌として、『統五明題集』の配列順で掲載されている実態の背景を考えてみると、『いざよひ物語』の編纂目的と関係が深いように思量される。すなわち、『いざよひ物語』の編纂目的については後述するが、『統五明題集』収載歌が『いざよひ物語』で別の歌題のもとに掲載されたのは、『いざよひ物語』の編者の意志による所為である、と考慮するのをもっとも妥当性を有するのではあるまいか。この点は、『いざよひ物語』が「寄月恋」の例歌として収載している七十一首のうち、原拠資料の歌題に合致するのはわずかに二十三首のみで、残りはすべて別の歌題の例歌であるという実態からも裏付けられ、要するに、「寄月恋」の歌群七十一首は、『いざよひ物語』の編者が自己の意図で行った再編集と考慮

され、ここには類題集の編纂基準を越えた文学作品たらしめようとする編纂意図が認められようか。

このような次第で、『いざよひ物語』が『統五明題集』とかなり密接な関係にあることは濃厚なのであるが、このことを裏付ける事例をもう一つ指摘しておこう。それは『風雅集』の

(24) 一すじにうきよりも猶うかりける 有しにかはる人のこころ  
は (寄人恋・一〇二)

(25) みをしらぬおもひと人やたがふらん うきをばをけるうへの  
おもひを (寄身恋・一〇二)

(26) おもはぬになす心しもいかなれや つねはながめてなみだの  
みうく (寄心恋・一〇三)

(27) わびつゝは人にまかせてうらみぬを うきをしらぬこころ  
とや思ふ (寄情恋・一〇四)

の(24)の永福門院右衛門督・教良女・花園院兵衛督・公宗の四首に關してである。この四首は、原拠資料の『風雅集』と『類題和歌集』にとびとびに当該歌題下に収録されている以外には、まったくこのままの形態で収載を見る歌集は、唯一、『統五明題集』のみである。したがって、この四首の『統五明題集』との一致はかなり強烈な証拠と認められそうである。ここに、この事例やこれまでに指摘したいくつかの事例からみて、『いざよひ物語』が直接に『統五明題集』に依拠して撰集されたとみることは許されるであろう。

なお、このほかにも『いざよひ物語』が『統五明題集』に依拠して撰集されていることを証明する事例はあるが、それらをこれ以上あげることは煩瑣なうえ、それほどの意味も持たまいと判断されるので、以下には、『いざよひ物語』収載歌の『統五明題集』におけ



95	寄湊恋	・二二七五	110	寄帯恋	・二三六五
96	寄海恋	・二二七三	111	寄布恋	・二三七一
97	寄獸恋	・二二九五	112	寄糸恋	・二三九三
98	寄猪恋	・二二九六	113	寄鏡恋	・二三四四
99	寄虫恋	・二二九七	114	寄書恋	・二三二九
100	(未収載・新後拾遺集)		115	寄弓恋	・二四〇五
101	寄人恋	・二三〇七	116	寄玉恋	・二三三四
102	寄身恋	・二三〇八	117	寄箱恋	・二三四二
103	寄心恋	・二三〇九	118	寄繩恋	・二三九七
104	寄情恋	・二三一〇	119	寄船恋	・二二八九
105	寄夢恋	・二三一一	120	寄網恋	・二一九九
106	寄枕恋	・二三八〇	121	寄簾恋	・二一九八
107	寄筵恋	・二三八七	122	寄鐘恋	・二三九一
108	寄衣恋	・二三五六	123	寄水恋	・二一八五
109	寄紐恋	・二三六九			

以上を整理すると、出典未詳の(1)の歌と『統五明題集』未収載の(7)の歌を除く、残りの百二十一首の原拠資料は、『風雅集』二十四首、『新千載集』三十五首、『新拾遺集』二十二首、『新後拾遺集』十首、『新統古今集』三十首ということになる。

#### 四 内容・編纂目的・成立時期などの問題

ところで、『統五明題集』からの抄出歌で編纂された『いざよひ物語』の内容を見ると、「月前忍恋」「寄月忍恋」「忍待恋」「月前待恋」「不逢恋」「逢不相恋」「別恋」「晝別恋」「月前別

恋」「月前別恋」「秋夜恋」「晝更恋」「暮恋」「深夜恋」「恋月」「月前恋」「名所恋」「忘恋」「月前恨恋」「寄月絶恋」「隔一夜恋」などの歌題をも含めて一括して、「寄月恋」の歌題が付された七十一首を中心として、「寄雲恋」八首と、「寄葵恋」「寄葛恋」「寄薄恋」「寄女郎花恋」「寄篠恋」「寄竹恋」「寄木恋」「寄杉恋」「寄松恋」「寄鳥恋」「寄泉恋」「寄池恋」「寄江恋」「寄滝恋」「寄河恋」「寄湊恋」「寄海恋」「寄獸恋」「寄猪恋」「寄虫恋」「寄心恋」「寄身恋」「寄情恋」「寄夢恋」「寄枕恋」「寄筵恋」「寄衣恋」「寄紐恋」「寄帯恋」「寄布恋」「寄糸恋」「寄鏡恋」「寄書恋」「寄弓恋」「寄玉恋」「寄箱恋」「寄繩恋」「寄船恋」「寄網恋」「寄簾恋」「寄鐘恋」「寄水恋」などの各一首とで構成されている。まさにミニ類題集と規定して憚り得ない内容と言えようが、はたして、『いざよひ物語』は通常の類題集に見られるような、単なる実用本意の類題集なのであろうか。

ここに『いざよひ物語』の編纂目的は何かの問題が提起されようが、この問題に示唆を与えるのが、冒頭の次の序文である。

比はやよひの十六のよひ、くも井にあそぶ月をながめて、むかしもいとなつかしくこひしく侍りぬ。いにしへをおもひいで、くちすさびしたるやまとうた、人の心のたねとやならんと、もしほぐさかきあつめつゝ、しるし侍りぬ。

すなわち、「ある三月の十六夜の宵に、宮中で、管絃の遊びをしながら、雲に出入りする月を眺めていると、昔がなつかしく、恋しくなりました。その昔をなつかしく思い出しながら、思わず心に浮かんだ歌を吟じましたが、その思わず吟じた和歌などが、これから



歌を詠もうとしている人たちの参考にでもなるだろうかと、思つて、手許の詠草類をかき集めて記してみました」と序文は記しているが、この序文の記事に窺われる本書の執筆意図によれば、本書は、「むかし」を「なつかしくこひしく」思い出しながら、編者が口ずさんだ詠歌類が、歌を詠み始めようとしている人たちへの参考にでもなるうとの考えのもとに撰集された類題集ということになる。この点、本書には、題詠歌を作る際のモデルたり得るべく、典型的な歌題および例歌で編纂された、単なる詠歌手引書とは違った性格・役割が指摘され、ここには通常の類題集とは異なった文学作品の類題集を編纂しようとする、編者の意図も多少ながら認められるのではなからうか。その意図の表れか、本書には、次の四箇所に詠歌作者注記が見出されるのである。すなわち、

(例) 月かげに身をやかへましあはれてふ 人のこゝろをいかでみるべき  
(寄月恋・六〇)

(例) しるらめやはのかにみえしみか月の そらにも人を恋やわたらん  
(同・六五)

の例の詠に「儀同三司母の歌なるべし」、例の詠に「家長卿の歌なるべし」とあるのと、「寄月恋」の例歌に「右七十一首 参議為家」、寄雲恋」の例歌に「右八首之詠歌為家卿」とあるのがそれであるが、『統五明題集』からの抄出歌で、明らかにここに注記した歌人の歌でない事情も自明な歌で撰集しておきながら、何故に、『いざよひ物語』にはこのような注記がなされたのであろうか。

まず、例の歌に付された注記について、安田氏は「この歌は、典拠と見られる『新後拾遺集』では『天曆御製』となっている。また、『村上御集』『万代集』では『広幡御息所』『玉葉集』では『源

詞子』の詠(村上天皇への返歌)となっている。いずれにしても、『儀同三司母』の歌ではなく、この注記がなせ付されているかは不審」と言い、また、例の歌に付された注記についても、同氏は「家長卿」に概当する人物は見出せない。後鳥羽院の和歌所開闢であった「家長」とすれば、『卿』と記すのは不適当である。あるいは「家長」の宛字とも考えられるが、それにしても、この注記も、65の歌は『宝治百首』の歌であるから、不審である」と言い、「寄月恋」に付せられた注記につれても、同氏は「右七十一首 参議為家」は、為家詠の意とも、為家撰の意とも解せられるが、『七十一首』中の多くが為家没後の詠であるから、いずれも当たらない」と言われるが、まったくそのとおりである。しかし、これらの注記が誤った内容であることを先刻承知である編者の立場に立つて考えてみるならば、例と例の歌に付された「儀同三司母」と「家長」とは、序文でいう「いとなつかしくこひしく」「いにしへをおもひ」出しながら詠じた歌の作者として、故意に演出的に設定された注記と考慮され、また、「寄月恋」の例歌に付された「右七十一首 参議為家」なる注記は、「寄月恋」の例歌が七十一首で、七十一首目の歌のみが為家の詠歌である意とも、あるいは、これらの七十一首が為家によって選出された意とも推察されるが、いずれにせよ、この注記もまた、故意に舞台装置された演出と考慮されるであろう。ちなみに、「寄雲恋」に付された「右八首之詠歌為家卿」の注記が、編者が故意に、為家が詠じた歌であると演出的に施したもの、と推察されることは言うまでもなからう。

つまり、『いざよひ物語』の注記については、『統五明題集』における歌題表記を無視して、一括「寄月恋」の例歌として扱った、

『いざよひ物語』の編者の作爲的处理とまったく同様に考慮されるわけだが、このことは、『いざよひ物語』の本文に、典拠とした『統五明題集』のそれと異なる箇所がまま指摘される現象を解明する手掛りを提供するように考えられる。その主要な異同箇所を指摘すると、次の『いざよひ物語』の

(60) 人とは月ゆへ落るならひぞと　こたへてそでのなみだとめ

まし  
(寄月恋・六)

(61) わかれちをいそぐこゝろの鳥よりも　まだそらたかき月ぞうれしき  
(同・一六)

(62) 音づるゝはつかの月のつらさより　ねまちのかげもまたやつたへむ  
(同・四八)

(63) いにしへのしづはた帯のいくかへり　我かたこひにむすほゝるらん  
(寄帯恋・一一〇)

の(60)・(63)の本文が、『統五明題集』では、(60)の下旬は「答やせまし袖の涙を」、(63)の二・三句は「いそがす鳥の声よりも」、(62)の歌は「夜がれそむるね待の月のつらさより　はつかの影も又やへだてん」、(63)の下旬は「我かた恋の末にむすばん」のごとくなっている。このほか、『いざよひ物語』と『統五明題集』の間に指摘される小異同は、およそ四十箇所に及び、それらを検討すると、単なるケアレス・ミスによる異同というよりも、『いざよひ物語』の編者による改訂と考慮されるように思われる。それは、(60)・(61)・(63)の詠が、もとの歌の歌句を少々編者好みの表現に変えて、もとの歌の世界とは多少趣向の違った雰囲気を持たせる歌境に仕上げられている事例や、(62)の歌が、もとの歌の「隔一夜恋」の主題が消え、所謂「寄月恋」の世界の歌へと転じられている事例によって、証明されるであ

ろう。となると、現存の『統五明題集』に未収録の(7)の歌はともかく(『いざよひ物語』が依拠した『統五明題集』には、この歌は収録されていたと推測される)、出典未詳の(1)の歌はもしかすると、『いざよひ物語』の編者の詠作である可能性も生じてくるのではなからうか。

それはともかく、「右八首之詠歌為家卿」の注が付せられている七十九首目あたりまでの箇所には、少なくとも、編者が序文で表明している「いにしへをおもひいでゝ、くちすさびしたるやまとうた、人の心のたねとやならん」という編集意識が働いていると見てよいのではなからうか。そして、「寄葵恋」の例歌である

(64) ほのかにも人をみあれのあふひ草　こゝろにかけて恋ぬ日もなし  
(寄葵恋・八〇)

の(64)から最後の「寄水恋」の例歌である

(65) ともすれば岩間づたひに行く水の　とどこほりてもぬるゝ袖かな  
(寄水恋・一二三)

の(65)までの歌題・例歌各一首の歌群には、安田氏が「本書の編集された目的は、他の類題歌集の多くと同様、詠歌の手引とするためであったろう」と言われる側面が多分に認められるわけだが、しかしこの歌群にも編者の先程触れた編集意識が働いていないことはないであろう。ここでこの編者の編集意識について憶測すれば、序文の「比はやよひの十六のよひ、くも井にあそぶ月をながめて、むかしもいとなつかしくこひしく侍りぬ」の記述や、藤原為家を注記に指摘している事例から見て、この撰集には、阿仏尼の立場に立つての編集意識が認められないであらうか。というのは、序文の「十六のよひ」および表題の「いざよひ物語」は、当然、阿仏尼の『十六夜

日記」を念頭においての措辞および命名であろうし、『いざよひ物語』の序文の内容も、『うたたね』の冒頭の「もの思ふことの慰むにはあらねども、寝ぬ夜の友とならひにける月の光待ち出でぬれば、例の妻戸おしあけて、ただひとり見出だしたる、荒れたる庭の秋の露、かこちがほなる虫の音も、物ごとと心を傷ましむるつまとなりければ、心の乱れおつる涙おさへて、とばかり来しかた行くさきを思ひつづくるに」の記事と多少似通った側面も指摘されるからである。ところで、私家集名を冠する中世私撰集の『光俊集』の奥書には、「右此一冊者先哲詠吟以所光俊朝臣心用粗集云々」なる記事があり、筆者は、この記事を、「先哲」の「詠吟」した和歌を取録する類題集などから、光俊朝臣の立場に立って、撰集して一書とした、と解するのであるが、この『光俊集』の記事を参考にするならば、『いざよひ物語』は、まさしく阿仏尼の立場に立って撰集された歌集ということになるであろう。ここに『いざよひ物語』の編纂目的は、通例の類題集の多くが有する詠歌の手引書としてのみの役割以上に、「むかし」を「いとなつかしくこひしく」思い出しながら、阿仏尼の口ずさんだ詠歌という虚構的に限定された例歌によって、文学作品的世界の構築を意図しながら、和歌を詠む初「人の心のたね」ともなるに足る詞華集（アンソロジー）を編纂することにあつたと言えるであろう。

最後に、『いざよひ物語』の成立時期は、いつであろうか。この点については、安田氏は、「本書は、『新統古今集』までの歌を持っているのであるから、その成立は、『新統古今集』の成立以後ということになる」と言及されているが、成立時期の上限はもう少し限定できるようだ。なぜなら、『いざよひ物語』の撰集資料が『統

五明題集』とほぼ推断できることを論証したことから、『いざよひ物語』の成立時期が『統五明題集』のそれより以降であることは自明の理であるからである。ところで、その『統五明題集』の成立時期は、その序文の末尾に「時に永正十二年南呂三日になん、みじかき筆にまかせ、いさゝか心緒をのぶるところ、しかなり」と記す記事によつて、永正十二年（一五一五）八月三日より以前と確定し得るので、この点からまず、『いざよひ物語』の成立時期の上限を、永正十二年八月三日より以降と想定し得よう。そして、その下限については、『いざよひ物語』の内部徴証から特定することは不可能であるが、本書の書写年代が、安田氏も「室町後期写か」と言われるように、室町後期と推定できるので、この点から一応、特定し得るであろう。となると、『いざよひ物語』の成立時期は一応、永正十二年八月三日より以降から、室町時代後期までの間ということになろうか。

なお、『いざよひ物語』をめぐって検討しなければならない問題は少なくないであろうが、『いざよひ物語』の成立の問題について、おおよその結論を導き出し得たいまは、それらの問題は今後の課題とすることにして、ここで一応、擧筆したいと思う。

#### 〔注〕

- (1) 『二八明題集』については、雑部の考察にすぎないが、拙稿「本妙寺藏『品経等法楽和歌』考」『花園大学国文学論究』第十五号、昭和六二・一〇、『題林愚抄』については、拙著『中世私撰集の研究』（昭和六〇・五、和泉書院）の序章の「中世私撰集の撰集資料——『和歌題林愚抄』から『明題和歌全集』へ——」、「明題和歌全集」については、拙稿「『明題和歌全集』の成立」『国語国文』第四三巻七号、昭和四九・七、『摘題和歌集』については、拙稿「『摘題和歌

- 集』の成立（上・下）」「『中世文学研究』第十二号・十三号、昭和六二・八、六二・八）を参看。
- （2）拙稿「『統五明題和歌集』の成立」「『中世文学研究』第十四号、昭和六三・八）を参看。
- （3）次田香澄氏『うたたね全訳注』（講談社学術新書二九八、昭和五三・一）から引用。
- （4）拙著『中世私撰集の研究』（昭和六〇・五、和泉書院）の第二章第一節の「『光俊集』の成立」参看。

——花園大学教授——